2024年12月29日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

守られて、前に

［マタイによる福音書2章13～23節］

占星術の学者たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言った。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。」ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り、ヘロデが死ぬまでそこにいた。それは、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。さて、ヘロデは占星術の学者たちにだまされたと知って、大いに怒った。そして、人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。こうして、預言者エレミヤを通して言われていたことが実現した。

「ラマで声が聞こえた。激しく嘆き悲しむ声だ。ラケルは子供たちのことで泣き、
慰めてもらおうともしない、子供たちがもういないから。」

ヘロデが死ぬと、主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて、言った。「起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった。」そこで、ヨセフは起きて、幼子とその母を連れて、イスラエルの地へ帰って来た。しかし、アルケラオが父ヘロデの跡を継いでユダヤを支配していると聞き、そこに行くことを恐れた。ところが、夢でお告げがあったので、ガリラヤ地方に引きこもり、ナザレという町に行って住んだ。「彼はナザレの人と呼ばれる」と、預言者たちを通して言われていたことが実現するためであった。

[1]　2024年の終わりに

　つい先日クリスマスイブを迎え、夕方、ここでもイブの礼拝を行うことが出来ました。それが５日前で、今日は今年最後の主の日の礼拝です。本当に一年が早いなあ、と感じますが、今日このようにご一緒に神様を礼拝して、祈りと讃美をもって新しい年を迎えられることは嬉しいことだと思います。

　皆様にとって、この一年はどのような一年であったと言えるでしょうか？

毎年恒例のことですが、年の最後の日曜日の礼拝の週報には、この年の教会の出来事・トピックスのような事柄を羅列して記させて頂いています。是非、ご覧下さい。今年は、私たち川越教会にとって、年の初めから大きな出来事がありました。前牧師の加藤享先生が、1月2日に天に召されました。本当に主に捕えられ、主にご自分を献げ切ったご生涯であり、説教者として、また素晴らしい牧会者でいらっしゃいました。加藤先生、この教会で告別式をし、既に召されていた喜美子夫人と共に納骨式もさせて頂きました。加藤先生ご夫妻が私たちに残して下さったものは本当に大きなものです。それは年の初めの1月のことでしたが、11月3日には、教会員の小林英二さんが突然主のもとに召される、ということがございました。11月初頭ですから、まだあれから2ヶ月も経っていないのです。奥様のかおるさん、そしてお嬢さんたちの喪失の深さは計り知れないと思います。改めて、ご家族の悲しみの中に、主イエス様が、天の望みと、深い慰めをご家族にお与え下さいますようにと、祈らずにはいられません。

　振り返ると小林英二さんが亡くなったその約一年前には、教会員の加藤明さんが天に召されたということがございました。まだその時から一年一ヶ月なのですよね。そして今年に、やはりその前年に神様のみ許に帰られた坪田房子さんと、永眠者記念礼拝の日、10月27日に川越霊園で納骨式を執り行いました。それらのことは、地上の別れという点で私たち教会の者にとっても悲しい出来事には違いないことですが、主イエスに在る永遠の生命の約束が、より確かなものとなる出来事でもあったと思います。

　また、これは今年にあったとても嬉しいこと、主に感謝することは、加藤偕子（加藤明さんの妻でいらっしゃる）さんが、5月19日の聖霊降臨日の礼拝の時にバプテスマをお受けになられたということです。聖書に「天において大きな喜びが沸き起こるであろう」とありますが、ご主人を送られた約半年後、神様がそのように導いて下さった、神様の御業を見せられたように思います。この事は、教会のみんなの大きな喜びとなりました。

　一年間の主日礼拝は52回あります。その一回一回を守られて執り行うことが出来ましたし、第一主日の主の晩餐式も守ることが出来ました。皆さんは、来たくても教会に足を運べない時もあったと思いますが、おいで下さる（参加して下さる）ということは、一緒に礼拝を作っているということであり、私は、皆さんの顔を拝見しながら一緒に礼拝を捧げることが出来ることが一番の喜びであり、励ましでありました。また、皆さんのお祈りを心から感謝しています。

[2]　「いつも喜び、祈り、感謝せよ」

さて、皆さんは今年の教会の年間聖句が何であったか、すぐに「この聖句です」と言えますでしょうか？　そうです、毎週の週報の表紙にも記されていますし、先ほど新生讃美歌でも歌ったあの聖句です。テサロニケの信徒への手紙一5章16～18節ですね。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです」。これは私は、神様からの命令であり、同時にお約束だと思っています。「いつも」、「絶えせず」そして「どんなことにも」と言っています。これは凄いですよね。つまり生活が順境の時だけでなく、「どんなことがあろうとも」ということですよね。「どんな時であっても」「喜び、祈り、感謝せよ」と。ちょっとひるんでしまうというのが私たちの正直なところだと思います。しかしそれでも「どんな時でも、どんなことにも」と命じておられるのは、それこそ「どんな時でも、どのような中にも」主が支え、守っていて下さっているという現実があるからそう出来る、ということではないでしょうか？だからこそ、その私たちと共におられる主に‟絶えず祈る”ことが出来るのではないか、そう思います。是非皆さん、今年一年を振り返り、この御言葉に信頼してそれをやって来たかどうか、そうやって後ろ向きにならず、導いて下さる主を信じ、前に進んで来たか、自分に問うてみたいと思うのです。そして、それは、私たち一人ひとりのことだけでなく、教会の新年の新しい歩みにもつながることだと思うのです。

[3] すべて、私たちを救うため

「どのような中にも主は共にいるのだ」ということを今申しました。今日の聖書の箇所は、クリスマスの出来事の後の、幼子イエスとヨセフとマリアのエジプトへの逃避行の物語ですけれども、これも、「主が共におられる」ということを私たちに確信させてくれる物語だと思います。所謂「逃れ」の中にも主は共におられるのです。クリスマスは「平和の物語」のように思ってしまいますけれども、実は主イエスが生まれたその世界というのは、実にどす黒い、人の悪の力が跋扈しているような暗い世界の中での出来事でした。この時のユダヤの王ヘロデは、実に残忍な権力者でした。彼は疑心暗鬼になり、自分の地位を脅かすのではないかと思った者を、自分の親族でも何人も殺しました。恐怖政治です。あの東方の学者たちに裏切られたと思った彼は、まだ赤子であるけれども「ユダヤの新しい王」と呼ばれて生まれたイエスを亡き者にしたいと思いました。しかし、それがどこに隠れているか分からないので、ベツレヘム中の2歳以下の男子を皆殺しにしたというのです。当時のベツレヘムの人口は千人以下で、殺された男子は恐らく15人から20人程だったのではないかと言われます。剣で刺したのでしょうか。「殺させた」という表現が、ある意味とてもリアルです。現代的です。自分が手を下すのではないのです。

聖書を見ると、この時幼子イエスが守られたのは、ヨセフに天使が夢の中で語ったからです。彼はいつも重要な所でお告げを受けています。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている」。そして、こう記しています。「ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り、ヘロデが死ぬまでそこにいた」。ヨセフは直ちに行動した。それが良かったんです。ヨセフの従順がイエス様を救ったと言って良いと思います。殆ど危機一髪のような状況です。そしてエジプトから戻って来るその時期も天使のお告げに従いました。つまり神様がこの危機の状況の中で人を導いているということです。ヨセフ自身は主の言葉に従っているだけであり、それが尊い彼の信仰だと思います。本当に危険が目の前に迫っていました。しかし、神様が「ご計画」を前に進めているのです。その「ご計画」って何でしょうか？どうしてもイエス様を守る、その神様の思いとは何でしょうか？それは、ハッキリしていると思います。―神様は、イエス様を守りたいというより、私たちを守りたいのです！そのために、今、この段階でイエスが死ぬということがあってはならない。だから一時エジプトに逃れさせた。しかし、時が来たら、彼はまたユダヤの地に導かれます。「ヘロデが死ぬと、主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて、言った。「起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった。」そこで、ヨセフは起きて、幼子とその母を連れて、イスラエルの地へ帰って来た」。そしてさらには、引きこもってナザレで暮らすようになります。聖書はこれらも全部「預言の成就」、と語っています。神様の御思いを軽んじてはいけません。それ必ず成ります。そのご計画の成就は、私たちが神様に赦されて生きることが出来るようになるということです！それ以外ではありません。主が十字架に掛かって下さって、こんな弱い、欠けだらけの者を見捨てないと、救いを成し遂げて下さった。私たちを「友」と呼んで下さるため、そのために、幼子イエスは一時エジプトに逃れたし、犠牲になった幼子たちさえ沢山いた。それも全部、私たちを救うためです…。

　私たちが出来ることは何でしょうか？―ただ神の愛の御業に感謝し、その神様と親しく交わって生きる以外にないと思います。「わが友よ」と呼んで下さるこの方を私たちも「友なる主よ」と呼びながら、祈りながら、一緒の礼拝の生活を大事にしていくことではないかと思います。私たち、この一年間、どんな中にも主が共におられたこと、守られたことを思いましょう。そして、前に進みましょう！皆さんお一人に主の守りと祝福がありますように！ 祈ります。

　主よ、あなたのご計画はいかに奇しきことでしょうか。人間の罪深さが覆っているように見える世界の中で、あなたのご計画は前進していることを信じます。ですから私たち、どのような中にあっても「いつも喜び、絶えず祈り、どんなことにも感謝する」生き方を選び取って行くことが出来ます。主の十字架と復活の故です。今年一年のあなたの憐みを感謝します。そして新しい年の中に、私たち、悔い改めと希望とを持って歩みを進めることが出来ますように。一人ひとりを守り、祝して下さい。主イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。